

第6分科会

芸術・表現系大学の学生が身につけるべき<資質>と<リテラシー>

報告者

垣内 幸夫（京都教育大学 教育学部音楽科 教授）

真下 知子（京都文教短期大学 幼児教育学科 講師）

葉山 勉（京都精華大学 デザイン学部建築学科 教授）

コーディネーター

高橋 伸一（京都精華大学 共通教育センター長 人文学部 教授）

社会や時代の変化により、芸術・表現系大学に求められる人材像も変容しつつある現在、表現や芸術の領域で学ぶ学生には、専門的な能力に加えて、より幅の広い一般的な基礎力も求められている。高度化、多様化、グローバル化する社会に出るために、芸術・表現系大学の学生が備えるべき資質とリテラシーは、従来の専門性を基盤とした能力だけでは対応できない時代に来ている。こうした状況において、学生に必要な資質・リテラシーをトータルな視点から分節化・再構築し、その能力育成のための教育プログラムを実質的に提供することができるかどうか、芸術・表現系の大学には問われている。

本分科会では、学士課程というトータルな教育プロセスを視野に置きながら、大学における初年次をターゲットにした教育プログラムの事例紹介を通じて、芸術・表現系大学の学生が身につけるべき資質とリテラシーについて具体的に検討していきたい。

<第6分科会>

芸術・表現系大学の学生が身につけるべき<資質>と<リテラシー>

参加人数 33名

報告者

第1報告者 垣内 幸夫 (京都教育大学 教育学部音楽科 教授)

第2報告者 真下 知子 (京都文教短期大学 幼児教育学科 講師)

第3報告者 葉山 勉 (京都精華大学 デザイン学部建築学科 教授)

コーディネーター

高橋 伸一 (京都精華大学 共通教育センター長 人文学部 教授)

(1) 分科会の趣旨説明

第6分科会のテーマとして選んだのは、「芸術・表現系大学の学生が身につけるべき<資質>と<リテラシー>」である。このテーマを設定した背景には、職業や仕事の内容が大きく変容する時代になり、芸術・表現系大学の卒業生にとって雇用情勢がますます厳しくなっているという「出口」に対する認識がまず第一にある。芸術・表現系大学を卒業する学生の「出口」の厳しさについては、2年前の第15回FDフォーラムで開かれた分科会(第6分科会「芸術系領域における教育の可能性」)において、すでに指摘されたことではあるが、その状況は現在も変わらずに続いたままである。他方、「入口」でも他大学と同様に、学生の自立意識の低下という問題も抱えている。

「入口」と「出口」の2つの問題を乗り越え、自らの人生を切り開き、社会に出たその先で能力を発揮できる人材を輩出することが、芸術・表現系大学には求められている。こうした要請に応えるためには、専門教育を中心としたトータルな4年間の教育プロセスを解析し、大学の目的に応じて、カリキュラムを通じて、さらには全学的な支援環境で学生を丁寧に育て上げる必要がある。

今回の分科会の具体的なテーマ設定をするにあたり、その鍵は、入学したばかりの学生の教育、つまり、初年次における大学の教育的な対応にあると判断した。というのも、高校までの学び・生活から、大学での学び・生活へのスムーズなモードチェンジが、そ

の後の4年間の学生生活を、より主体的にかつより機能的にすると考えられるからである。もちろんそのスムーズな移行は、学生の資質や能力によるところもあるが、支援し教育を提供する側の大学の姿勢や体制によるところも大きい。

こうした問題意識のもと、今回の分科会では、芸術・表現系大学において初年次プログラムを実際に担当してきた3名の先生方をお招きして、午前中は、その事例報告発表を中心に、午後は、フロアーの参加者との意見交換を通じて、「芸術・表現系大学の学生が身につけるべき<資質>と<リテラシー>」について検討し、さらにはテーマにかかわる問題意識の共有を図った。

(2) 報告の概要

■第一発表：垣内 幸夫先生

(京都教育大学 教育学部 音楽科)

タイトル：「音楽領域専攻学生に身に

つけてもらいたい資質・知識・能力」

午前セッションの第1発表は、京都教育大学の垣内幸夫先生の発表報告であった。垣内先生が今回、発表の対象として具体的に取り上げたのは、平成11年度から担当している初年次教育科目「基礎セミナー」である。京都教育大学は教員養成系の単科大学であり、大学に入ってきたばかりのフレッシュマンに、初年次教育として各専攻領域が「基礎セミナー」という授業を提供する。今回、垣内先生が発表した

基礎セミナーは、音楽領域（音楽科）に入学してきたばかりの1回生に提供される授業である。

「基礎セミナー」の授業内容は、初年次科目という性格上、全学共通要素として＜性教育・性暴力の学習＞や＜図書館ガイダンス（著作権の学習も含む）＞といった生活支援や修学支援の内容を取り入れてはいるが、その特徴は、授業の大半を用いて音楽領域に入学した学生全員が協同して行う「オペレッタ創り」にある。

垣内先生は、「音楽というのは、人と人をつなぐもので、学生には、音楽の果たす役割や音楽と人間について、この授業を通して考えてもらいたい」と率直に語る。京都教育大学の音楽領域専攻には、教師を目指して入学してくる学生もいれば、音大を目指していた学生も来る。音楽と長い間付き合ってきた学生たちだが、子供の頃から個人レッスンを受けていると、師事している先生の言うことをすぐ素直に聞き入れるという性質があるという。個人主義という良い形で花開く場合はいいのだが、一方、社会を知らず、わがままなタイプも多い、と垣内先生は説明する。そのような新入生に対して、この授業のオペレッタ創りを通して、総合的な人間力を身につけていって欲しいと垣内先生は語る。具体的には、学生が、作曲班、脚本班、演出班、企画班のどれかの役割を担いながら、班内でかつ班ごとにコミュニケーションを取りながらオペレッタ創りは進行する。その際には、当然お互いにぶつかり合うこともあるし、喧嘩をすることもある。それを乗り越えていくところに、大きな成長が生まれるという。教員としての役割は、学生たちが主体的に行う活動をいかに見守るか、という点にある。最終的には、授業の最後の時間にオペレッタ公演を公開で行うが、そのビラ配りまで学生自らが行うという。

報告発表の最後で、垣内先生は、この授業で目指しているのは、音楽や学校現場に携わった場合に求められる総合力である、と強調して発表を締めくくった。

■第二発表：真下 知子先生

（京都文教短期大学 幼児教育学科）

タイトル：「芸術系大学における

初年次教育の取り組み」

午前セッションでの第2発表は、京都文教短期大学の真下知子先生の発表であった。真下先生は、5年前から京都市立芸術大学の美術学部で初年次教育に当たる授業科目「情報基礎学」を、専任の先生方との定期的な打ち合わせや議論をベースに設計し、授業を展開してきた。今回の発表では、その授業の5年間の実践と研究を踏まえて、芸術系大学における初年次教育の授業現場の報告、特に、授業に取り入れた教育的な創意工夫や試行錯誤を中心に発表報告がなされた。

芸術系大学では実技の専門基礎教育については、非常に長い歴史とノウハウが蓄積されているが、一方、専門教育以外について、初年次で何か取り組まれてきたかという、多くの芸術系大学ではそうではなのを実情ではなかろうか。しかし、大学で制作活動を行う上では、実技の他の授業科目を4年間でどのように計画を立てて履修していくのか、といったことも大切になる。高校とは違って大学では、様々な講義スタイルで先生方が授業をする。授業への適応や、課題やレポートを書く力も当然求められる。卒業生の活動を見ても、制作活動だけではなく、実に様々な形で芸術にかかわる仕事に就いている。それ故、様々な角度から物事を見る力、情報活用能力、人とのコミュニケーション能力なども非常に重要な要素になっている。こうした背景から、高校から大学への転換教育、ラーニングスキル、リサーチスキルを含めた、学部に通じた基礎教育の必要性が高まってきている。真下先生はこのように、発表の冒頭に芸術系領域における初年次教育の必要性を述べたあと、具体的に、京都市立芸術大学の展開している初年次科目の説明に入った。

「情報基礎学」で授業目標の中心においているのは、「芸術系の学生が自分たちの作品を発信していくうえで必要な情報活用能力の育成」である。内容的には、情報モラル、知的所有権、個人情報保護等に関する意識を高めることが目的である。その他に、大学の授業への適応という初年次教育・共通教育の観点から、特にコミュニケーション能力、問題解決能力の育成も重視している、という。この能力は作品による表現とは別に、一般社会において、受け手の立場になって伝える力であり、他者と協調して企画制作する力でもある。

毎年120名程度の学生が登録するが、「情報基礎学」は90分/週1コマ、半期の授業である。授業スタイルは、講義と5、6名のチーム学習という形式で行っている。こうした形式は、開講から5年間の実践を毎年、調査・点検・研究を積み重ねながら、新しい要素を取り入れてきた結果である。発表では年度ごとの授業研究によって改善された教育手法に関して具体的に説明された後、2012年度に授業に取り入れた「議論の場としてのスケッチブック」の有効性について、授業で実際に使用したスケッチブックを提示しながら詳細な情報提供がなされた。

■第三発表：葉山 勉先生

(京都精華大学 デザイン学部 建築学科)

タイトル：「表現ナビ：京都精華大学で学ぶ」

午前セッションの第3発表は、京都精華大学の葉山勉先生の発表であった。葉山先生が今回発表の対象としたのは、京都精華大学の芸術系3学部（芸術学部・デザイン学部・マンガ学部）のカリキュラムに2011年度新規開設された授業科目「表現ナビ」の授業実践である。

「表現ナビ」という授業の大きな特徴のひとつは、芸術系3学部に入學してきたばかりの1回生全員がそれぞれ学部ごとに分かれ、約200人規模の大クラスで受講するという点にある。京都精華大学の場合、入学試験から各コースに分かれており、必修のコース実技も1回生から始まる。そこで教員や先輩と実技で顔を合わせることで、コース内での人間的なつながりは密になる。コース内で友人ができたり、先輩に相談できたりというメリットも大きいという。一方、それは他のコースや学部の人たちとの接点を作りづらいというデメリットの側面も有している。例えば、京都精華大学の芸術系の学生の場合、洋画で入ってきた学生が4回生終わった時に洋画を描いているかといえば、100%そうではないという。立体造形の学生がアニメーションを創ることもあるし、逆にアニメーションの学生が、プロダクトを創ることもある。こうした入口と出口での学生の興味関心の変化に学生が柔軟に対応していくためにも、葉山先生は他のコースの人たちとの人間関係を作れるかどうかのポイントであるという。こうした意味では、学部内で

この授業を設計する上で注意したことは、授業内容を「大学での学び」、「大学での生活」、「キャリアデザイン」の3つの観点からの「支援」で組み立てることであったという。というものも、これらの支援の観点は、大学に入學してくる新入生が入學当初に抱く主たる不安材料と直接リンクするからである。振り返ってみると2011年度は良い意味でも悪い意味でも、すべてを盛り込んだ総合オリエンテーション型の初年次教育になったと説明した。

授業運営としてのこの科目の特徴は、複数の教職員で授業担当にあたったことが挙げられる。ラーニング・ポートフォリオ作成の手引きなども行った。科目担当者としての役割は担当回での授業の提供もあるが、それ以上に、それぞれの回の授業の設計から運営までのコーディネーションが重要であった、など、具体的な授業の側面について報告がなされた。

(3) 報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

午前中の報告に対する質疑に関しては、それぞれの先生方の持ち時間が許す限り、午前中も受け付けた。特に、真下先生の発表報告について、具体的な授業手法や運営にかかわる質問が多数寄せられた。その多くは講義系授業の中で真下先生が使用した「スケッチブック」にかかわることであり、その関心の高さがうかがわれた。その時の質問項目に関しては以下のとおりである。

- 授業の中でどれぐらいの時間スケッチブックを使用するのか。
- ディスカッションのグループ分けはどのようにするのか。
- グループ間でスケッチブックを覗く機会などはあるのか。
- グループ内で活躍する学生とそうでない学生が出てくると思うが、評価はどのようにするのか。
- 同じグループで、メンバーを変えるということはないのか。

昼食を挟んで行われた午後のセッションでは、まずは昼休みにフロアーの参加者に提出してもらった質問票に答えるラウンドを1回行い、その後、フリーにディスカッションを行った。コーディネーターとパネリストの先生方との昼のミーティングで、参加者が

この分科会に参加してきた目的やそれぞれのコンテキストや立場が異なるゆえ、なるべくそれぞれの参加者の皆さんの状況の説明や情報を提供してもらった方が良い、という方針が固まった。フリーディスカッションを行うに際しては、フロアーのほぼ全員に発言を求めるよう意識した。参加者のみなさんにはそれに応えてもらい、数多くの質問・意見の交換がパネリストの先生方となされた。

以下は午後のディスカッションで出された質問・意見・要望である。

<報告発表についての質問・意見>

■創作オペレッタ創りでどのような資質・能力が養われるとお考えですか。(垣内先生への質問)

■創作オペレッタを取り入れた「基礎セミナー」で他の座学科目との違いが明確に表れるのは、どのような点でしょうか。(垣内先生への質問)

■教育方法(教育工学)としてのスケッチブックの活用が話題の中心になりましたが、なぜ、コメントカードを改善してスケッチブックを使用するようになったのか。(真下先生への質問)

■スケッチブックを使用するときのディスカッションのテーマについて、具体的にどのように学生を誘導しているのか。(真下先生への質問)

■芸術系大学の学生ということで、スケッチブックに絵的な表現を求めたり、学生の方からそれを希望することはないのですか。(真下先生への質問)

■「表現ナビ」の次の段階として「表現ゼミ」を構想されているということですが、具体的にはどのような内容を計画中でしょうか。(葉山先生への質問)

<全体討議での質問・意見>

■「芸術・表現系リテラシー」とは何か。

■個人的な意見ですが、一年前期は、入試直後のため、歴史にも知識があり、小論文の対策をしていたり、国語の勉強や新聞コラムを読んでいた者が多く、文章表現力は少しあると思う。ではなぜ、大学で4年間過ぐすと文章が書けなくなるのでしょうか。

■表現系学生は「普通」のタイプではなく社会人基礎力が低いと思われるが、実際にそうなのだろうか。

■教員世代よりも現在は(ファインアート系でも)コミュニケーションや協調性が必要になっていると思われる。しかしどこも大人数で押し込めるような授業でやり過ぎているようだ。それを教えることへの不信

が教員の中にあるのではないか。

■この分科会の主題としては、「芸術系大学で専門以外に何を学ぶべきか?」、そして「学生が身につけるべき言葉での表現力とは?」というところに行きつくと思われます。自分の作品や演奏を「ただ示す」だけで生きていける芸術家は今日少ない(ほばいない?)からです。この点についてパネリストの先生方のご意見を聞きたい。

■スキルは資質として生まれながらに持ち合わせているもの、テクニックは学べば身につくものであり、リテラシーはこの2つの側面を持っている。したがって資質の部分を教えることは難しい。

■オムニバス形式の授業のマイナス面を克服するにはどうしたら良いか。

■「表現系」という用語には「体育系大学」も含まれるので、ぜひ、体育系を意識した分科会も開催してほしい。

■女子学生へのライフデザインについて、初年次教育に盛り込まれているかどうか。

■初年次教育の内容、教養教育の内容の必要性をどのように学生に伝えるか。

■アカデミックならびにスチューデントスキルを身につけることの重要性を初年次以降に、あるいは専門教育担当の「教員」にいかにして伝えるか。

■就職戦線では、どの業種でも学生のクリエイティブな部分が試されており、その面では、表現系の大学の学生は強いはずであるが、書類選考で落とされており、最後の選考まで残っていないことに対して、企業側へ不信を感じる。



音楽領域専攻学生に身につけてもらいたい資質・知識・能力

京都教育大学 教育学部音楽科 教授

垣内 幸夫

京都教育大学は教員養成に特化した単科大学である。本学の教育目的は「教養高き人としての知識、情操、態度を育成し、学校教育、社会教育、生涯学習等の広い教育分野で地域社会に貢献できる人材を養成することを目指す。」というものであり、私が担当する基礎セミナー（音楽領域）の授業は、音楽科の学生を対象にした初年次教育のプログラムである。

以下にシラバス（2012年度）の記述内容にそって授業について簡単に紹介する。本授業の受講生数は毎年15～6人程度で、初年次前期の必修授業である。

授業の概要

基礎セミナー（音楽領域）では「大学での学び方」（図書館の利用法・ノートの取り方・レジュメの書き方・発表の仕方・レポートの書き方・楽譜の書き方・ディベートの方法等）を中心に学習する。音楽領域専攻では互いに協力しあって創作オペレッタを制作し、上演することを通して音楽と人間について考える。

授業の到達目標

大学での学び方を理解する。

共同で音楽作品を創作し上演することで、学校教育における音楽の意味と機能について考えていく。

授業計画

1. オリエンテーション 2. 図書館の利用法（全領域共通） 3. 知的財産教育について「映像で学ぶ著作権」（全領域共通） 4. 企画する・題材を選ぶ（図書館の利用法・発表の仕方・ディベートの方法） 5. 脚本を作る・役割を決める（レジュメの書き方・レポートの書き方） 6. 作曲する（楽譜の書き方） 7. 編曲する（楽譜の書き方） 8. 舞台を創る（発表の仕方） 9. 演出する（発表の仕方） 10. 練習する（発表の仕方） 11. 上演する（発表の仕方） 12. 鑑賞する（ノートの取り方・レジュメの書き方） 13. 記録する（ノートの取り方・レポートの書き方） 14. 総括する（ノートの取り方・レジュメの書き方） 15. 創作オペレッタの教育的意義

基礎セミナー（音楽領域）の授業では「学生一人ひとりの個性と能力を生かしながら、共同作業によって社会性・協調性を育む。」ことを目指し、受講学生が創作したオペレッタは毎年本学講堂において公開で上演している。

第6分科会ではこの授業の具体的内容について詳細に報告し、音楽を専攻する学生に身につけてほしい資質・知識・能力について考えていきたい。

＊参考文献：垣内幸夫他著『オペレッタを創ろう』（きた出版株式会社、1989年）

芸術系大学における初年次教育の取り組み

京都文教短期大学 幼児教育学科 講師

真下 知子

関西の K 芸術大学、美術学部において 2007 年度より試行されている共通基礎科目「基礎情報学」では、美術学部の学生に必要な情報モラル、知的所有権、個人情報等の意識の向上をめざすとともに、開講時より、チーム学習を取り入れ、コミュニケーション能力、問題解決能力の向上をめざした授業設計、実践を行ってきた。本稿では、開講時から現在までの実践内容および授業改善をめざした取り組みの概要を述べる。さらに、今年度の新たな試みであるスケッチブックを活用したチーム学習（個人の考えを外在化し、その情報を共有する場としてのスケッチブックの活用）の実践を紹介し、協働学習の活性化や学生同士の相互作用による学習の深まりをめざした授業設計、内容、方法について考える。

1. はじめに

大学全入時代を迎えた今日、個々の大学の特性や学生のレディネスおよび学習歴に即した初年次教育が求められている。

K 芸術大学、美術学部において、2007 年度から試行されている「基礎情報学」は、美術学部の学生に必要な情報活用能力のうち、特に情報モラル、知的所有権、個人情報の保護等に関する知識を養うとともに、ラーニングスキル、リサーチスキルの育成をめざす初年次教育として位置づけられており、筆者は非常勤講師としてこの科目を担当している。

以前から取り組まれてきた専門基礎教育とは別に、本学の学生が一年次に身に付けるべき能力とは何かを専任教員とともに議論する中で、特に重視してきたのは、コミュニケーション能力、問題解決能力の育成である。従来、制作活動における表現は自己のイメージや思いの具現化であり、あくまでも制作者側からの情報発信と考えられてきた。しかし、一般社会においては、情報の受け手が常に存在することを意識し、受け手の立場に立った表現・発信の方法を習得することが必要であ

る。また、美術の分野において今日繰り広げられている多様で国際的な活動においては、作品を他者に伝える力、他者と協同で何かを創作したり、企画したりする力が求められる。

2. 美術学部における初年次教育の試行

(1) 「基礎情報学」の内容・方法

本授業のシラバスは情報とコミュニケーション、情報社会のセキュリティ、著作権、肖像権、個人情報とプライバシー等からなる。（詳細は当日提示する。）

講義によって情報関連の基礎的な知識を習得した後、身近なトピックを取り上げ、チームでのディスカッションを行う。また、ラーニングスキル、リサーチスキルとして、レポートの書き方や発表の方法についても学び、個人によるレポート作成やチームによるテーマ設定から発表までのプロセスを通して、問題解決能力およびコミュニケーション能力の育成を図る。

(2) 授業の方法

- ①対象：美術学部、主に 1 回生、2011 年度登録者 121 名（美術科 65 名、デザイン科 28 名、工芸科 26 名、総合芸術学科 2 名）
- ②時間数：週 1 コマ（90 分）・半期
- ③授業形態：講義・演習（5, 6 名のチーム学習）

3. 研究の経過

前述のように、本授業では基礎教育カリキュラムとして、特にコミュニケーション能力、問題解決能力の育成を重視した授業設計・実践を行っており、開講から現在まで、毎年、視点を変えて調査・研究を行ってきた。研究の経過を表1に示す。

表1 研究の経過

2007	授業内容	カリキュラム
2008	授業評価	教育効果・改善点
2009	授業方法	学生との双方向コミュニケーション授業
2010	学生の意識	初年次(前期)の学生の意識変化の把握
2011	授業方法	チームによる協働学習の活性化をめざした働きかけ

2007年度は共通基礎教育としての本授業の位置づけ、内容・方法の検討を行った。2008年度は、授業評価アンケートの分析を通して、「受講者の興味・関心を喚起するテーマ設定」、「学習者の学習歴に配慮した講義内容、学習形態の工夫」などが課題としてあげられた¹。2009年度は、学生が記述するコメントカードの質的な分析より、コメントのつながりを重視したフィードバックの重要性や個々の学生に応じた支援の必要性が示唆された²。2010年度は、入学時から前期終了時までの半年間に「高校生と大学生の違い」「美術、工芸、デザインなどの専門家にとって、専門的な知識・技能以外に必要な力」等に関して、学生の考え方がどのように変化するかを調査し、芸術系大学の学生を対象とした初年次教育において扱う内容や方法を検討した³。

4. 2011年度、スケッチブックを活用したチーム学習の実践

(1) スケッチブック利用の目的

開講時から2010年度まで、主に教員とのコミュニケーション手段として活用してき

たコメントカードを2011年度は、スケッチブック上に貼り付け、チーム内で共有することにより、ディスカッションの活性化、さらには個々の思考の深まりと「情報」に関する意識の向上をねらいとした。

(2) 特徴と利用方法

①スケッチブックの仕様：A3版

②利用方法

- ・1チーム(5～6名)に1冊とし、授業の最初に配布して、終了後に回収する。
- ・個人の考え、意見、チームでの議論の流れ、まとめを記入する。

③期待される機能

- ・個人の頭に浮かんだ事柄を気軽に外在化することができる。(思考の外在化)
- ・スケッチブックを囲んでディスカッションすることにより、個々が考えた事柄を共有できる。(意見の共有)
- ・初回から最終回まで連続して記録が残る。教員も助言を求められた際、それまでの議論の流れが把握しやすい。(記録)
- ・グループで、必要な際に振り返ることができる。(グループポートフォリオ)

(3) スケッチブックの利用に関するアンケートの実施

授業の最終日に、スケッチブックの使い勝手、使い方の変化、議論の場として活用できたか等について、学生を対象にアンケート調査を実施した。結果として、本実践の教育効果および改善点が示唆された⁴。詳細については当日報告する。

¹ 真下 知子，横田 学，中村 博幸，「芸術系大学における初年次教育の取り組み」，京都市立芸術大学美術学部研究紀要 (53)，pp. 91-98，2009

² 真下知子，横田学，中村博幸，「芸術系大学における初年次教育の取り組み(2)ー学生コメントから探る授業改善のための一方策ー」，京都市立芸術大学美術学部研究紀要 (54)，51-57，2010

³ 真下知子，中村博幸，横田学，「芸術系大学における初年次教育の取り組み(3)ー入学時と前期終了時における学生個別の比較をふまえてー」，京都市立芸術大学美術学部研究紀要 (55)，65-69，2011

⁴ 真下知子，中村博幸，横田学，「芸術系大学における初年次教育の取り組み(4)ーチームによる協働学習の活性化をめざした働きかけー」，日本教育工学会第27回全国大会，pp. 387-388，2011

京都精華大学 2011 年度開講 共通必修科目「表現ナビ」について

京都精華大学 デザイン学部建築学科 教授

葉山 勉

系列：共通教育科目／履修学生：芸術・デザイン・マンガ学部1年生／単位：必修2単位

サブタイトル：「京都精華大学で学ぶ」

授業の概要及び目的：

大学での学びを理解し、意欲的に大学生活を送るための基礎をつくることを目的とする。

京都精華大学の学生として身に付けておくべき基本的な知識やマナーを学び、学習するために必要な基礎的な姿勢と技能を修得する。他学部で展開される教育内容を知ることによって自身の興味の幅を広げ、4年間の見通しと将来の目標を立てる。

到達目標：

- (1) 大学の歴史を知り、大学の構成員であることを自覚する
- (2) 充実した大学生活を問題なく過ごすための基礎知識を理解する
- (3) 他者と円滑にコミュニケーションを取り、自身の考えを表現することができる
- (4) キャリアデザインの概念を理解し、大まかなプランを構築することができる

授業の特長：

- ①チームティーチング・参加型授業、②各学部教員参加、③事務局職員参加、
- ④ラーニング・ポートフォリオ作成、⑤全回公開授業・映像記録

授業内容：

回	タイトル	内容	学内担当
1	ガイダンス	① ガイダンス（10分）科目の位置づけ・他：高橋・葉山 ② アンケート調査（20分）：福岡室長 PPIにてクリッカー質問15問 ③ 「今、気になっていること」各自記入（ステップ1 20分）：葉山 ④ コースの異なる人達と（5人程度）意見交換（ステップ2 5分×4＝20分） ⑤ 各自感想記入（ステップ3 10分）→ WS：1 提出 ⑥ まとめ：高橋・葉山	学長室・教務部
2	学生生活と社会ー①	① はじめに（高橋・葉山）5分 ② 安全・安心な学生生活：学生課 島崎課長（70分） ③ おわりに（高橋・葉山）、コメント記入 10分 配布資料：一人暮らしマニュアル、薬物啓発、相談会案内	学生部
3	セイカ学ー①	① はじめに（高橋・葉山）5分 ② 歴史講義：対談 赤坂 vs. 坪内：司会福岡（70分）創設期～ ③ おわりに（高橋・葉山）5分 ④ 自由自治とは？感想文 各自記入（10分）	学長室

4	大学で学ぶ ー①	① はじめに（高橋）5分ー2～3回の振り返り ② 大学授業・試験に関する実用的ガイド（西口）40分 ③ 単位制度の理解（西口課長）30分 ④ おわりに（葉山）、コメント記入 10分	教務部
5	表現論ー①	① ノート・テイキング＋感想文説明（20分） ② アートの世界 講義（25分）、マンガの世界 講義（25分） ③ 感想文用下書きメモ作成（20分） 【宿題：感想文】	芸術教員 マンガ教員
6	キャリアデザイン ー①	① セイカ学生の可能性（川端先生）40分 ② 「わたしはこんな人！」記入（10分） ③ リフレーミング説明（5分） ④ グループ意見交換＋各自記入（30分）	就職部
7	学生生活と 社会ー②	① 飲酒問題について（学生課長）20分 ② グループディスカッション（誕生日学生グルーピング＋先輩）	学生部 学友会
8	セイカ学ー②	① 講義（20分）1990年代～現在 ② 職員チームによるプレゼンテーション（40分） ③ グループ意見交換（20分）、④ 各自まとめ（10分）	学長室 広報部
9	大学で学ぶ ー②	① そもそも「大学」とは何だ：理想と現実（20分） ② 学究生活における文献活用：情報館 Tips（30分） ③ 事例に学ぶレポート作成のマナーとタブー（30分） ④ コメント記入（10分）	人文教員
10	表現論ー②	① デザインの世界 講義（30分）、人文学の世界 講義（30分） ② 感想文用下書きメモ作成（20分） 【宿題：感想文】	デザイン教員 人文教員
11	ハラスメント	① ハラスメントを知る（カウンセラーより講義 60分） ② 感想文記入（20分）	外部講師
12	キャリアデザイン ー②	① 仕事とジョブ、業界、会社、必要なスキルとプロセス（40分） ② 「仕事人生のキーワード」作成（20分） ③ グループ意見交換（20分） ④ ラーニング・ポートフォリオ説明（10分）	就職部 企画室 情報管理課
13	表現と 環境問題	① 京都精華大学の環境への取り組み（10分）：葉山 ② 「環境とアート・デザイン・マンガ・人文」事例報告（60分）：片木先生＋学生代表 ③ 感想文記入（20分）【宿題：レポート「私のエコライフ」】	デザイン教員環 境施設課 学生グループ
14	まとめ	① 自分史の延長として大学で学習する事、経験したい事、10年後構想を記入（30分） ② グループ意見交換（20分）、発表（10分） ③ まとめ（30分）	

今後の課題：

適正クラスサイズ／担当教員／オリエンテーション／情報リテラシー／図書館リテラシー／…

